別紙

事前レクにおける
各委員のご意見とその対応案

令和8年3月

福島河川国道事務所

国土交通省

事前レクにおける各委員のご意見とその対応案

国土交通省

第5回阿武隈川上流緊急治水対策環境委員会事前レク委員意見と対応案

項目	ご意見	対応（案）
モニタリング重点監視箇所の選定	これまで河道掘削や伐採を実施した箇所について、重点監視箇所に選定していない箇所も含めて再繁茂や再堆積の有無を確認し、必要に応じて重点監視箇所の追加や見直しを行った方が良い。CCTVだけでは水中部が再堆積しているか不明であるため、予算に限りはあるが、再堆積については水中部を確認するのも一つだと考える。その結果を踏まえ、当初定めた重点監視箇所の選定方法の基準について見直し、今後掘削を行う箇所での重点監視箇所の選定基準の精度向上が図られると考える。	• 今後、重点監視箇所以外での再堆積、再繁茂状況を確認し、必要に応じて新たな重点監視箇所への位置付けを検討予定。確認結果や、今後のモニタリングから得られる知見も蓄積した上で、重点監視箇所の選定基準の見直しについてもを検討予定。
	阿武隈川水系河川整備計画で位置づけている五十沢地区の河道掘削予定地には圃場（柿、ネギ、モモ、キャベツなど）が存在し、関係者との調整に時間を要する恐れがある。他地区も含め掘削が一番最初に始められそうな箇所から検討する方法も考えられる。	• 河川整備計画における掘削予定箇所について、現地の状況を再確認し、モニタリング箇所を選定予定。
分析方法	冠水頻度の検討において、（環境が良好とされる）それぞれの断面において（自然裸地や草本類など）状況が異なるため、それぞれの環境要素や河川環境区分ごとで良好な冠水頻度を整理してみると良いのではないか。	• 今後、環境要素や河川環境区分ごとの冠水頻度を整理予定。
	数センチ浸水している程度であれば、植生の成長としては望ましい環境となっている可能性がある。冠水時間割合については、浸水深毎でも整理すると、冠水時間割合と土砂再堆積・再繁茂の関係が見えてくるかもしれない。また、気温の変化と植物の成長は大きく関係していると思われるため、気温の変化に着目することも重要かもしれない。	• 浸水深や気温との関係について分析予定。
	伐採箇所は、今回の結果からも冠水指標だけでは分析できない（そもそも冠水していない）。再堆積や再繁茂の要因分析として、高水敷掘削箇所、水中掘削箇所、伐採箇所とでは施工後に生じる現象が異なるため、冠水指標のみではなく、その場その場の状況にあわせて要因分析をしていった方が良いと思う。	• 再堆積や再繁茂は、冠水指標のみならず、河道特性（河道線形・勾配）や洪水特性、環境特性にも影響すると考えられるので、各地区に応じた分析を検討し進めていく予定。
	再繁茂で問題となる植物は限られているため、それらの植物（マダケ、ハチク、ハリエンジュ、アレチウリ等）がどのような場所に繁茂しているのか、その特性について調べておくと良い。	• 今後、各地区でインパクト・レスポンスの詳細分析を行う際に、各植物が繁茂している領域と、摩擦速度等の水理量の関係を分析予定。

事前レクにおける各委員のご意見とその対応案

国土交通省

第5回阿武隈川上流緊急治水対策環境委員会事前レク委員意見と対応案

項目	ご意見	対応（案）
管理指標	砂州高や相対水深のように維持管理指標を設けることは賛成だが、砂州高管理指標の標高51.9mは治水安全度（流下能力）に影響を与えないことも確認しておいた方がよいと考える。	• 設定した管理砂州高まで堆積が進行した場合に流下能力を満足するかどうかは、平面二次元計算や準二次元計算で確認し、流下能力が足りない場合は、それも満足する指標を設定予定。
	河道の湾曲部のカーブの形によっては、必ずしもP.47に記載している相対水深が正しいとは言えないかもしれない。	• 鎌田地区において望ましい相対水深の管理指標について詳細な分析を実施していく予定。
	鎌田地区にて検討していただいているインパクト・レスポンスの連関図、鎌田地区以外でも同様の整理を行い、管理手法を検討できればよい。	• 鎌田地区にて管理手法を精査した後に、鎌田地区以外についても、インパクト・レスポンスの検討、管理手法の検討を実施予定。 なお、管理手法は治水安全度を考慮したものとします。
	二次元のシミュレーションは、実現象と合っていないこともあるため、モニタリングを行っていく中で、定めた指標が管理指標として想定通りに機能しているか確認していくとよい。モニタリング結果と比較し、必要に応じて、モデルの改良、管理指標値の妥当性の確認や、管理指標値の見直しを検討すればよいと考える。	• 本検討で使用している平面二次元河床変動計算モデルは、R1.10出水時の痕跡水位との比較、H30～R1年の河床変動傾向の比較を行い、再現性を確認している。 ただし、河床変動計算には、モデル基礎式の不確実性、河床材料や境界条件の不確実性が含まれるため、決定論的な議論はし難い。 そのため、調査を継続的に実施し、予測結果の妥当性、管理指標の妥当性を確認し、必要に応じて管理指標値の見直しを検討する予定。
維持管理	維持管理対策を実施するタイミングも重要。管理手法を基にライフサイクルコストも考慮した計画が作れると良い。	• 今後、管理指標・閾値に着目し、ライフサイクルコストも考慮した河道維持管理対策を行う計画立案を検討予定。 • 上記検討を進めながら、治水と環境を両立した河道を維持・創出するために必要な対策費用等を確認していく予定。
	維持管理の対策を実施するタイミングとしては、管理指標に基づく基準で決める方法もあれば、大規模洪水後の災害復旧のタイミングも考えられる。例えば10年に１度といった期間で決める方法もあると考えられる。安価に維持管理をしていくことを想定し検討しくと良いかもしれない。	
整備箇所の検討	今後 河川整備を実施していく中で、瀬・淵、ワンド・たまり等の環境を創出せずとも、魚は自分たちで住みかを探したり、身を守る能力を備えているかもしれない。しかし、魚にとって良好な環境の保全・創出を行うという考えは素晴らしいため、今後の委員会の中で議論できればと思う。	• 治水と環境を両立した河道を維持・創出するための検討を進め、今後、委員会で議論させていただく予定。